



TITLE:

ヒープの解析 (形式言語理論とオートマトン理論)

AUTHOR(S):

内村, 桂輔

CITATION:

内村, 桂輔. ヒープの解析 (形式言語理論とオートマトン理論). 数理解析
研究所講究録 1982, 458: 11-19

ISSUE DATE:

1982-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/103091>

RIGHT:

ヒープの解析

山梨大 工学部 計算機科学科

内村桂輔

1. まえがき

データ構造の一つであるヒープは, ヒープソート, ([9], [1]) として使われるばかりでなくプライオリティキューを作るためにも使われる [5]。

この論文はプライオリティキューのために使われるヒープに新たに一つの要素を挿入する時に必要な交換回数の平均を調べる。

二分木上のヒープの時にはその交換回数の平均は $O(1)$ であることは示されている ([2], [3])。ここではその平均値を具体的に求めるとともに二分木上のヒープについても考察する。

2. 定義

各々が t 個以下の子を持つ木を t 分木という ($t \geq 2$)。

木 T 上の葉の数を $|T|$ であらわす。

一般性を失うことなく我々は次のようなヒープを考えよう。

T 上のヒープとは、 T の各葉に自然数をつけたもので、次の条件を満たしているもの。

(1) 異なる葉には異なる数がつけられている。

(2) 各葉につけられた数はその子葉につけられた数より小さい。

我々はヒープに新たに一つの要素を挿入して、再びヒープを作ることと考える。そう入する位置は子の数がより小の葉で深さが最小のものの中で、一番左側の葉の子の位置である。その子のうち空いているものの中で左端の位置。この位置を $I.P.$ ということにする。挿入後、親子の比較、交換をくりかえし (2) の条件が満たされるようにする。この手間の平均的な評価を与えるのが我々の目標である。

T を木として、 $|T| = n-1$ とする。この T 上に $\{1, 2, \dots, n\}$ のうちの $n-1$ 個の元でヒープ h を作り、その残りの元を $v(h)$ とする。木 T が与えられた時、組 $(h, v(h))$ 全体の集合を H_T であらわし、その要素の数を $|H_T|$ とする。この時 H_T の各組が等確率で生起すると仮定する ([7] 参照)。各組 $(h, v(h))$ に対し、 $v(h)$ を h に挿入して再びヒープ

π にするために必要な交換回数を $b(h)$ とする。この時交換回数の平均 $L(T)$ は次のようになる。

$$L(T) = \left(\sum_{(h, v(h)) \in H_T} b(h) \right) / |H_T|.$$

3. 結果

補題1. T を n 分木として, $|T| = n - 1$ とする。 T の I.P. から根への距離を d とすると,

$$L(T) = d/n + (n-1) \times R/n,$$

$$R = \sum_{v(h) \neq 1} b(h) / (|H_T| \times (n-1)/n). \quad \square$$

n 分木 T の部分木で, T の根の子を根とし, T の I.P. を I.P. とするものを \hat{T} とする。すると補題1の R は次のようになる。

補題2.

$$R = L(\hat{T}) \quad \square$$

補題1と補題2より次の補題が得られる。

補題3. 任意の木分木 T ($|T|=n-1$) に対して, T の I. p. の深さを d とする。すると,

$$L(T) = d/n + (n-1) \times L(\hat{T})/n. \quad \square$$

木分木 T, S について, T が S の拡大であるとは, 次の三つの条件が成り立つことである。

(1) $|T| = |S| + 1$

(2) T と S の根を一致させた時, S は T の部分木。

(3) T と S の I. p. は一致している。

補題4. 木分木 T, S において, T が S の拡大ならば,
 $L(T) < L(S)$. \square

木分木 S, T について, S が T の短縮形であるとは, 次の三つの条件が成り立つことである。

(1) S と T の根を合わせると, S は T の部分木。

(2) S と T の I. p. は一致する。

(3) S には I. p. の深さ以上の深さを持つ葉はない。

この時補題4より次の補題が得られる。

補題5. 木分木 S, T で, S が T の短縮形ならば,

$$L(T) < L(S).$$

□

次に完全 t 分木 (complete t -ary tree [6, p. 400]) を考える。要素の数が $t^n - 1$ の完全 t 分木 $T(t, n)$ であらう。 $t = 2$ の場合は、補題 5 より次のことが言える。

補題 6. 任意の 2 分木 T に対して、自然数 n が存在して、 $L(T) < L(T(2, n))$ となる。 □

補題 2 の前で定義された \hat{T} は、 T が $T(t, n)$ の場合には、 $T(t, n-1)$ になることがわかる。故に補題 3 より次の補題が得られる。

補題 7. 任意の $n \geq 2$, $t \geq 2$ に対して、

$$L(T(t, n)) = n/t^n + (1 - 1/t^n)L(T(t, n-1)).$$
 □

次に $1/t$ を不定元 x でおきかえ、その時の $L(T(t, n))$ を $U_n(x)$ と書くと、上の式は次のようになる。

$$U_n(x) = nx^n + (1 - x^n)U_{n-1}(x), \quad (n \geq 2)$$

$$U_1(x) = x.$$

この時、多項式の列 $\{U_n(x)\}$ に関して次の性質が知られている。

定理 ([8]). $U_m(x)$ は $m(m+1)/2$ 次の多項式であり、

$$U_m(x) = \sum_{n=1}^{m(m+1)/2} a_n^{(m)} x^n$$
 とおくと次のことが成り立つ。

m 以下の n に対して、

$$a_n^{(m)} = d(n),$$

ここで、 $d(n)$ は n の約数の数をあらわす。 □

例えば $U_4(x)$ は次のようになる。

$$U_4(x) = x + 2x^2 + 2x^3 + 3x^4 - 3x^5 - x^6 - 2x^7 + x^8 + 2x^9 - x^{10}.$$

また、 m 以上の n に対しても次の事が成り立つ。

正数 α が与えられた時、自然数 N が存在して、 $n \geq N$ ならば、 $|a_n| \leq (1+\alpha)^n$ となる。

$d(n)$ については次の性質が知られている。

定理 ([4, p. 260]). 任意の正数 δ について、

$$d(n) = O(n^\delta).$$
 □

これらのことより, $K_1(x) = \sum_{n=1}^{\infty} d(n)x^n$ とおくと, 次のことが成り立つ。

補題 8. $|x| < 1$ とみたる任意の複素数 x について,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} |v_n(x) - K_1(x)| = 0,$$

□

この事と補題 7 より $L(T(x, n))$ は n に関して単調増加である事がわかる。

定理 1. $L(T(x, n))$ は単調増加して, $K_1(1/t)$ に収束する。

$K_1(1/t)$ を求めるために次のような式の変形を利用する。

$$\begin{aligned} K_1(x) &= \sum_{n=1}^{\infty} d(n)x^n = \sum_{n=1}^{\infty} x^n / (1-x^n) \\ &= \sum_{n=1}^{\infty} x^{n^2} \left(1 + \sum_{k=1}^{\infty} 2x^{kn} \right) \end{aligned}$$

この式の変形をもちいて $K_1(1/t)$ を小数点以下 5 ケタ求めたのが次の表である。

t	2	3	4	5
$K_1(1/t)$	1.60669	0.68215	0.42109	0.30175

この事より二分木 T について, $L(T) < 1.60669$ であることがわかる。

$L(T(t, n))$ の $K_1(1/t)$ への収束のようすは, 次の表で与えられる。

t	2	3	4	5
$L(T(t, 10))$	1.59653	0.68206	0.42109	0.30173

文 献

- [1] Floyd, R. W., Algorithm 245: Treesort 3, C. ACM, 7, 12, 701 (1964)
- [2] Gonnet, G. H. and Rogers, L. D., An algorithmic and complexity analysis of the heap as a data structure, Research Report CS-75-20, Univ. of Waterloo, (1975)
- [3] Gonnet, G. H., Heaps applied to event

driven mechanisms, C. ACM, 19, 7,
417-418, (1976)

- [4] Hardy, G. H. and Wright, E. M., An Introduction to the Theory of Numbers (Oxford Univ. Press, London, 1960)
- [5] Johnson, D. B., Priority queues with update and finding minimum spanning tree, Inf. Proc. Lett., 4, 3, 53 (1975)
- [6] Knuth, D. E., Fundamental Algorithms (Addison-Wesley, Reading, Mass., 1968)
- [7] Knuth, D. E., Sorting and Searching (Addison-Wesley, Reading, Mass., 1973)
- [8] Uchimura, K., An identity for the divisor generating function arising from sorting theory, J. Combinatorial Theory (A) 31, 131-135, (1981)
- [9] Williams, J. W. J., Algorithm 232: Heapsort, C. ACM, 7, 6, 347-348 (1964)